

## 新教育施設計画の考え方

### 温故創新

温故	読書活動、調べる学習、ふるさと教育、心の教育など、これまで取り組んできた教育が全ての学びの基盤となる。
創新	多様な個に対応した個別最適な学びを保証し、これからの時代に求められる資質・能力を育成できるように、AIやIoT等のテクノロジーや外部人材を積極的に活用するなど、習熟と探究の循環的な学びを目指す。

#### 目指す教育

## 愛と英知と活力

～誇りを持って、自分の未来を切り開いていく～

大熊町の教育が育む  
次世代に必要な資質・能力

常に好奇心を持って  
世の中を見る目

多様な価値観を受け入れる柔軟性

ちょっとした変化を  
敏感に感じ取る感性

恐れずに  
チャレンジする意欲

見たこと・感じたことを  
先取りして形にできる  
デザイン力

#### 先人に学び、新しい文化を紡ぐ教育

おおくまの学校教育が  
めざす子どもの姿

誰もがLet's Challenge!  
未来をつくるアイ & プライド

「おおくま」を学び、  
「おおくま」から学び、  
「おおくま」を創り出す子ども

〔アイ〕は、「愛」と「Eye」（眼識・ものを見る目）と4つの「I」を表す

- ・「Individual」（個性の発揮）
- ・「Inclusion」（認め合い）
- ・「Innovation」（新機軸）
- ・「Intelligence」（すぐれた知恵）

一人一人の多様性に応じた誰もが学び育つ環境の中で、今までに捉われぬ新しい工夫や方法を積極的に取り入れ挑戦することにより、自分の資質・能力を伸ばし自分の人生を豊かに、そして幸せにするとともに、世界中のどこにいても何をしていても「学びのふるさと おおくま」に誇り（プライド）を持ち、「おおくまの未来」を考える子どもの姿を目指す。

多様性（多様な人との関わり・多様な学びの方法）に対応した  
個別最適化の学び  
〔イエナプラン教育の理念に学ぶ〕

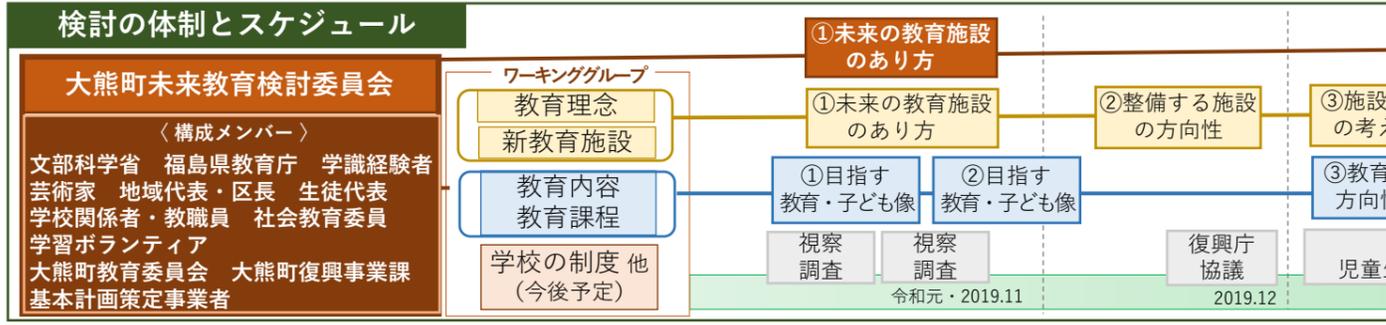
本の生まれる町 ～これまでの充実した取組がベース～

読書の町 読み聞かせ 調べる学習（図書館+探究活動）

特別支援教育 英語教育 ICT教育

障がい者にも 外国人にも やさしいまち

ふるさと教育 放射線教育 多文化・多言語 国際色豊か



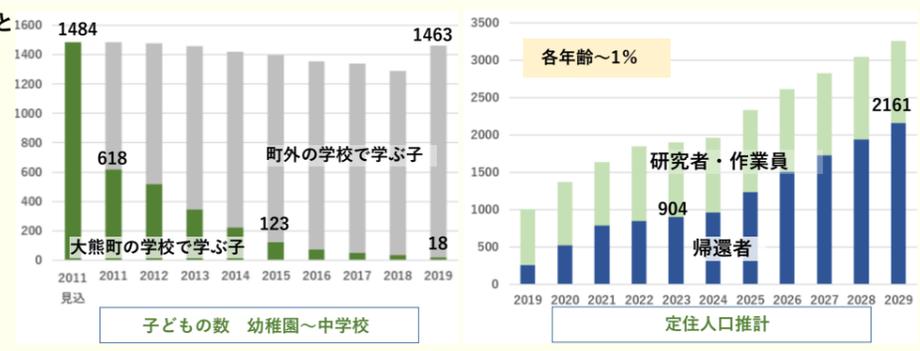
（今後の予定）

- 令和2～3年度 設計
- 令和3～4年度 建設工事
- 令和4年4月 会津若松にて義務教育学校開校予定
- 令和5年4月 大熊町で学校再開予定

#### 未来のために、おおくまの教育ができること

- ・大熊町に戻って学びたいと思える「おおくまの教育」の創造
- ・大熊町とつながりを持ち続けたいと思える「おおくまの教育」の構築
- ・新しく大熊町で学びたいと思える「おおくまの教育」の発信

＜子どもは町の未来であり、町の宝＞  
大きな役割を果たせる学校施設に



#### 目指す施設像

施設名	面積
保育所	900㎡
大野幼稚園	1,000㎡
熊町幼稚園	1,000㎡
大野小学校校舎	4,400㎡
熊町小学校校舎	3,500㎡
大熊中学校校舎	5,200㎡
大野小体育館	1,300㎡
熊町小体育館	1,400㎡
大熊中体育館	2,400㎡
大野児童館	2,225㎡
熊町児童館	3,333㎡
図書館	2,225㎡
文化センター	3,333㎡
総合スポーツセンター	8,864㎡

放課後子ども教室を  
新教育施設に整備

#### 高機能・多機能でコンパクトな施設

新教育施設

幼保園園舎  
800㎡

+

小・中学校校舎  
4,000㎡

+

小・中学校体育館  
2,000㎡

#### 施設の果たす役割

- ① 0歳から100歳まで誰もが学び育つ
- ② 誰もが学び直しができる
- ③ 多様性への対応
- ④ 地域コミュニティの再生
- ⑤ 子どもと居住者との交流
- ⑥ 健康・体力の向上
- ⑦ おおくまを世界に発信

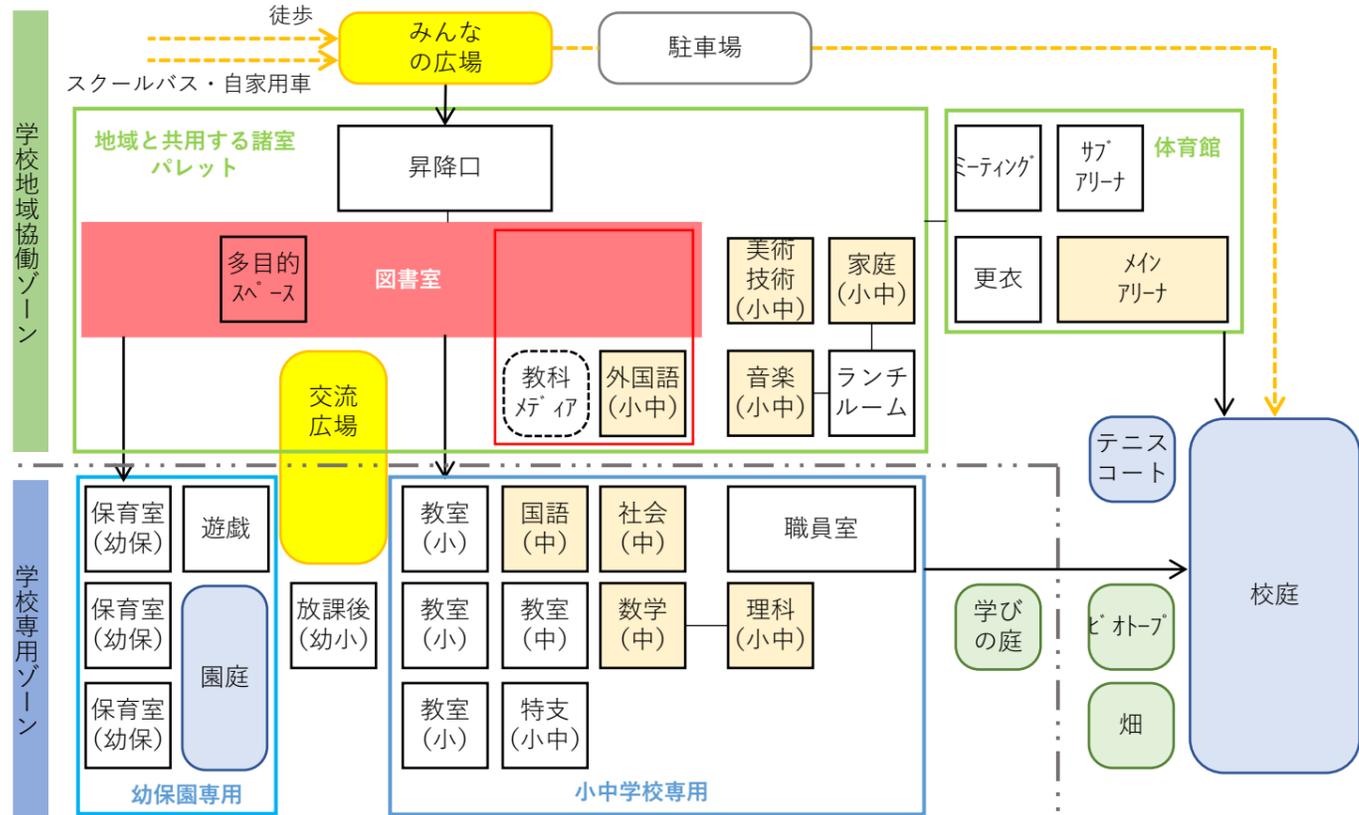
#### 新教育施設の整備方針

- 保・幼・小・中の連携を図る一体的な施設
- 0歳から預かり保育を実施できる施設
- 多様な学び、多様な集団編制に対応できる教室
- 教育の変化、多様な取り組みに柔軟に対応
- 図書室機能の充実、特別教室の多機能化
- 放課後子ども教室の設置
- 図書室、特別教室、運動施設等の地域開放
- 環境教育に興味・関心がわき、学べる施設
- ゼロカーボンに対応した施設

未来を拓く	学地融合	地域再生の核	社会と協働する	規模を活かす	建築が社会に応える
通わせたい、通いたいと思える魅力ある学校	読書のまち おおくまを担う図書室	学校開放により社会教育・社会体育機能を担う	居住する子どもと避難先の子どものつながる	少人数ならではの個性に応じた学びの場	子ども達の心身に寄り添う健康で快適な空間
最先端の教育論 Society5.0, school ver.3	学校が地域や団体の様々な活動拠点となる	庁舎・交流ゾーンと連携したコミュニティの核	町を超えて双葉郡や他県とつながる	一人一台のICT機器や設備の確保	災害に強く安全安心に学校生活を送れる建築
世界とつながるICT設備交流する場	仲間ができる、暮らしを豊かにする地域の拠点	教育でまちを元気にしようとする人の活動拠点	研究者や芸術家等の専門家とつながる	教科横断型の学びとそのための環境の確保	県産材などの木材を活用した温かみのある空間
障がいや不登校の子ども達が通いやすい学校	地域の伝統や文化を継承する場	園児から大人まで多世代が一緒に使う	NPOやボランティア等の学校を支援の拠点	競争から協働へのシフトと環境の整備	世界基準のSDGsに適合する
高校や大学の新しい学びに連続する学びの場	体育館・運動場が健康・体力向上の拠点となる	学校や地域の情報を受発信できる情報基地	まちと学校をつなぐ子ども達の作品や飾り付け	小さく初めて大きく育つ拡張性	大熊町再生のシンボルとなるデザイン

## 施設の構成 協働的な活動を生み出す新教育施設の構成

- ① **新教育施設の顔・学校生活の中心となる図書室** 読書のまち大熊、読み聞かせ活動や読書教育を継承し、子ども達も大人も誰もが親しめる図書室を、学校の中心、誰もがアクセスしやすい位置に配置する。
- ② **多様な活動・交流の場となる教室・学習空間** 子どもの数、個に応じた学びを実現するため、一斉授業だけでなく多様な学習形態がとりやすいよう様々なコーナーを備え、ICT化された教室・学習空間とする。
- ③ **子ども達と町民が共に使う施設** 図書室・特別教室・ランチルーム・体育館等は、学校と地域が共用するスペースとし、お互いに利用しやすく、また安全管理ができるゾーニングとする。



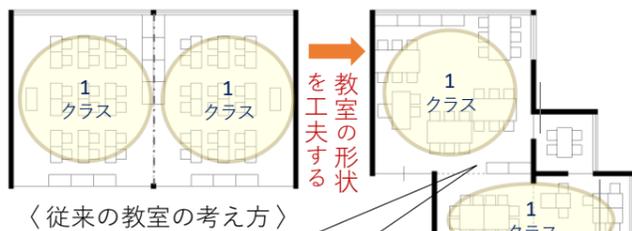
※四角の大きさは部屋の大きさを示していません

### 多様で個別最適な学びを実現する教室まわり

- 一人一人の学習・生活ニーズに対応できる教室まわり
- 遊びや体験を大事にする幼稚園、個別最適化された学びが様々な展開される小学校、教科担任制のもと教科の特色を実感しながら主体的に学ぶ中学校、各年齢段階の成長にふさわしい学習環境が整えられる教室
- 乳児と幼児、低学年と高学年、小学校と中学校等、発達段階や教育のねらいに応じたスケール・機能を備えた教室
- 各年齢の子どもの数の変動に対し、人数や集団が変わっても個別最適な学びや多様な活動が行いやすい教室
- ICTを備え、個人学習、協同学習、発表、交流等、多様な教育活動が可能な教室

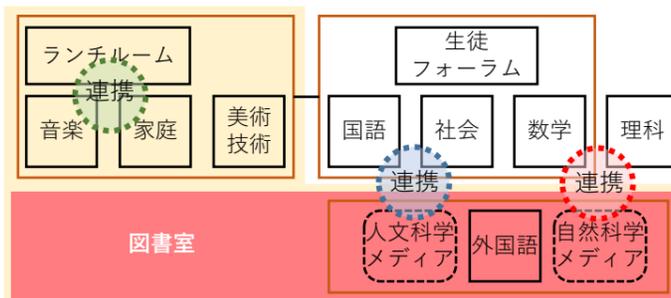
### 幼稚園・小学校の教室まわり

- 可動間仕切りで分ける教室
- 形状で分割する教室



- 多様なコーナーが作りやすい教室まわり
- 複数学年で一緒に利用することもできる

### 中学校の教室構成 (教科センター方式)



- 生活の中心となる生徒フォーラム＝中学教室を設ける
- 教科専用の教室を設ける (教科センター方式) 各教科の教室や図書室等、教科ごとの特長や雰囲気や備えた空間で活動でき、学びに対する意欲を高める
- 地域利用を可能にし、学び直しのための教室ともなる

## 配置計画 敷地形状と高低差を活かす建物配置

大川原地区の位置づけや地区の中における敷地の立地等から、9つの目標を総合的に実現する配置とする。

- 1 学校の様子を感じられ、まちに活力を生み出す校舎配置
- 2 庁舎から子ども遊び場までつながる歩行者ネットワークを形成
- 3 子どもから大人まで多世代が自然と交流できる配置
- 4 自然に囲まれた立地を生かした自然環境の確保
- 5 低層、コンパクトで活気を感じられる建築
- 6 まちの復興のシンボルとなる建築
- 7 木造・木質化
- 8 安全・安心を支えるセキュリティのゾーニング
- 9 将来的な拡張性や更新性の確保

敷地条件	
敷地面積	約33,100㎡
用途地域	指定なし
防火地域	指定なし
建ぺい率	60%
容積率	200%
高低差	三段造成 (82.5m、83m、86.1m)
低位	北東道路面 約81m
高位	西側宅盤 約86.1m

### 大川原地区における新教育施設の立地と他施設の位置関係

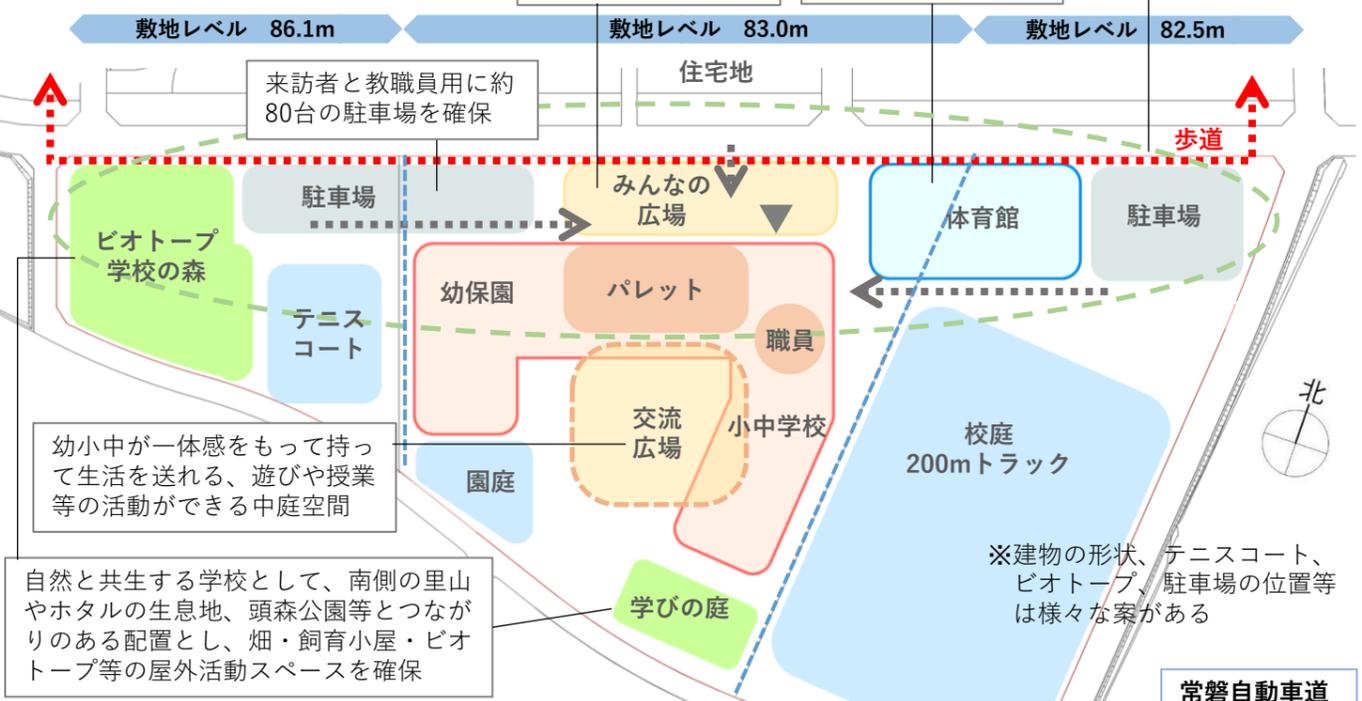
- 新教育施設の敷地北側に歩道を整備し、庁舎、交流ゾーン、福祉ゾーンが新教育施設を介して歩行者ネットワークとしてつながる
- 庁舎や交流ゾーンで行われる催しに対して新教育施設も関われる関係性をつくる
- 地区全体で機能を整理し重複を避ける
- 北側に住宅地が広がるため、北側に対して敷地のレベル差を極力少なくすることで、関係性をつくりやすくする
- 常磐道からの騒音を緩和できる建物配置とする



### 施設配置の考え方

#### 造成計画:

敷地は東西にわたって約5mの高低差がある。これを西側86.1m、施設群を建設する中央部を83.0m、東側のグラウンド部分を82.5mの3つのレベルに造成する。



**シンボルゾーン**  
学校の存在を示し、人々を導き入れる場。(ビオトープ、学校の森、公園等)

**新教育施設建物ゾーン**  
図書室、交流広場を中心に、幼稚園・小中学校を配置。地域利用施設は道路側に配置

**運動ゾーン**  
200mトラック、野球場、サッカー場が確保できる面積と形状。約1万㎡

常磐自動車道道路騒音の影響を避け、校舎は離れた位置に配置

※建物の形状、テニスコート、ビオトープ、駐車場の位置等は様々な案がある